

# 西大寺<sup>じきどういん</sup>食堂院・北辺坊の調査

奈良文化財研究所 都城発掘調査部

## 1 はじめに

### 調査経緯

調査地は、平城京右京一条三坊八坪(西大寺北東部・食堂院推定地)・右京北辺三坊三坪にあたります。調査は、最初に第404次調査として調査地南辺部を、次いで第410次調査としてその北側を発掘しました。調査面積は第404次調査が723㎡、第410次調査が1052㎡、合計1775㎡。なお、現水路によって調査区は三分割されており、以下便宜的に南区・中区・北区と称します。

南区のうち、第404次調査部分は埋め戻し済みです。調査期間は、第404次調査が5月24日～8月30日、第410次調査が7月31日からで、現在継続中です。

### 西大寺食堂院

**西大寺** 西大寺は、孝謙<sup>こうけん</sup>太上天皇(称徳<sup>しょうとく</sup>天皇)の発願で、天平神護元年(765)から造営が始まった寺院です。「造西大寺司」という役所が設置され、国家事業として造営されました。称徳天皇死後も、規模は縮小しつつも造営は続き、宝亀年間(770～780)にはほぼ寺観を整えました(西大寺関係略年表参照)。

西大寺は平城京で大規模な造営が行われた、最後の寺院です。今日、西大寺の縁起・寺域・堂舎・仏像・什器など全財産を書き上げた目録『西大寺<sup>しざいりょう</sup>資財流記帳』(宝亀11年(780)・以下『資財帳』と称します)が、大規模で壮麗な様相を伝えています。しかし、比較的早い時期に衰退してしまい、現在の境内は奈良時代の寺域のごく一部分で、周辺では市街化が進んでいます。こうした状況から、西大寺の伽藍・建物配置の詳細や、寺域などは不明な点が多く残されています。『資財帳』の語る西大寺の姿は壮麗ですが、その情報は文字情報に限られ、具体的な配置などはわかりません。

これまでに、発掘調査は東塔・防災工事に伴う調査の他、現境内地外での調査が行われ、徐々にデータが蓄積されつつあります。しかし、それでもなお、具体的な建物配置や、北限の施設は多く不明のままです。

**食堂院** 食堂院は、食堂を中心に、大炊殿などの関連施設から構成される区画(院)です。食堂は単なる給食場所ではなく、「食事」という一つの修行の場でした。また、仏に捧げる供物を調製するのも食堂院で、金堂・講堂に次ぐ重要な建物(「堂」と位置づけられます。

一方、大炊殿などの空間では、食物の調理や盛りつけ、食料の貯蔵・調達などが行われ、実務空間でもありました。

西大寺食堂院では、奈良市による3次にわたる調査(奈良市西大寺第8次・第12次・第15次。以下市\*次と称します)等が行われています。たとえば第12次調査では、大型の礎石建物の北東隅部分を検出し、食堂の可能性を想定しているなど、重要な成果があがっています。

### 北辺坊

平城京右京の北辺で、2町分北に張り出した部分です。かつては、その存在は否定されていましたが、現在では北辺坊の存在を認める見解が主流となりつつあります。ただし、その設置時期や、具体像については議論があり、確定していません。

## 2 主な調査成果

### 西大寺食堂院

西大寺食堂院の遺構は、基本的に奈良時代後半、西大寺創建から『資財帳』が作成された宝亀11年以前のものと考えられます。主要建物の配置は極めて計画的です。なお、建物配置および各建物の柱間等については、別図をご参照下さい。周辺からは、鷗尾<sup>しび</sup>・鬼瓦・軒瓦(新形式の軒平瓦含む)・緑釉埴<sup>ろくゆうせん</sup>・二彩垂木先瓦・奈良三彩盤などが出土しました。

**檜皮殿**(第404次調査部分) 南区南端部で確認しました。『資財帳』では長さ10丈、広さ4丈。検出遺構から、桁行9間×梁行4間で四面廂付の東西棟礎石建物。東西約30m、南北約12m。礎石の据付け穴を確認しましたが極めて浅いものでした。

**軒廊** 南区南部で確認しました。礎石建ちです。幅約5mで、長さ3約15m。檜皮殿と大炊殿をつなぎます。

**大炊殿** 南区中央付近で確認しました。『資財帳』では長さ9丈、広さ5丈で、瓦葺き。検出遺構から、桁行7間×梁行4間で四面廂付の東西棟礎石建物。東西約27m、南北約15m。基壇・礎石

の据付け穴・抜取り痕跡を確認しました。推定東西30m、南北18m。版築は現状では認められません。礎石据付け穴は、一辺1.4～1.6m程の隅丸方形の坪掘り地業を施します。残存する深さは0.5～0.7m程。版築状に土を突き固める穴が多く、瓦を層状に敷き込むもの、人頭大の石を入れるものもあります。なお、こうした工法は西隆寺回廊でも確認しています。

**甲双倉** 南区北端・大炊殿の北で確認しました。『資財帳』では、瓦葺きの校倉造りの双倉。イメージとしては正倉院の正倉の小型のものに近いと考えられます。掘立柱の東西棟・総柱建物です。想定される建物規模(柱位置による)は東西約21m、南北6m。

なお、この甲双倉は『資財帳』での建物規模と若干異なりますが、これは、倉庫の大きさは通常の内法で測る(容積を示すため)ためなどによると考えられます。

**北門** 中区南部で確認しました。掘立柱二本の門で、柱間約2.4mほど。築地(または土塀)に開く穴門の様なものだと考えられます。築地の痕跡は確認できませんでしたが、築地の雨落ちと見られる溝を、北門のすぐ南側で検出しました。この溝は、門の前で幅が狭くなっています。

**東西塀** 檜皮殿の北入側柱に柱筋を揃える掘立柱東西塀。柱穴4基を確認しました。食堂院の南北のほぼ中央に位置します。

**東檜皮厨**(第404次調査部分) 南区南東に推定しました。『資財帳』では長さ11丈広さ4丈。南区南東部で検出した凝灰岩列(凝灰岩を据付けた溝と、抜取った溝が重なりあい、一部凝灰岩片が残存しています。基壇化粧痕跡)を、東檜皮厨のものと推定しました。ただし、柱痕跡や北端が不明なことから、建物位置が若干北に移動したり、建物規模が北に延びて『資財帳』の記載より若干大きくなる可能性も否定できません。

**埋甕遺構**(第404次調査部分) 南区南東部で確認した埋甕据付痕跡。計12基確認。各埋甕間は約1.5m。東西に4基並ぶ列を南北方向に4列分検出。うち4基は、攪乱により確認していません。市第15次調査でも検出。東檜皮厨と関わる可能性もあります。

**井戸**(第404次調査部分) 南区中央付近で確認しました。井戸屋形を伴います。井戸屋形は東西約5m、南北約9m。桁行3間×梁行2間。井戸枠が残存し、平面はほぼ正方形です。井戸の大きさは、井戸枠内法で一辺約2.3m、残存する深さは約2.8m。木簡など、多くの遺物が出土しました。現在出土遺物の整理・分析中です。

### 条坊関係遺構

今回の検出遺構から想定される一条北大路の側溝心々距離は54尺(45大尺・約16m)。また、

坪境界間の距離は78尺(65大尺・約23m)。大尺を用いるとみられることから、奈良時代当初に設定されたものだと考えられます。側溝から瓦を中心とする多くの遺物が出土しました。

**一条北大路南側溝** 中区中央付近で確認しました。幅約3.5～4mで、残存する深さは0.7mほどです。数回にわたる浚渫・改修が行われています。溝の下層の出土遺物は奈良時代前半のもので、

**一条北大路北側溝** 今回の調査では確認できませんでした。現水路の真下にあるためと考えられています。なお、中区北端部分で、東西溝を1条検出しました。ただし、幅約1～1.5mほど、残存する深さ約0.3mほどと、南側溝に比べ極めて小規模です。

### 北辺坊(右京北辺三坊三坪)

調査地は右京北辺三坊三坪の坪中央付近南端に位置し、遺構は希薄です。広場の様にも感じられます。土器・瓦等の遺物が出土しました。

**南北溝** 北区西半で確認した南北溝です。区画溝と考えられます。2条あり、ほぼ同じ場所で付け替えられています。埋土の様相から、徐々に埋まったのではなく、一度に埋め立てられたと考えられます。奈良時代前半から中頃にかけての土器・瓦が大量に出土しました。

**東西塀・南北塀** 北区西端で南北塀1条、南部で東西塀2条を確認しました。掘立柱塀。区画塀と考えられます。上述の南北溝より新しい遺構です。

## 3 おわりに

### 西大寺食堂院の全貌がほぼ明らかに

食堂院の主要堂舎を、『資財帳』と対応させつつ、位置・規模等を具体的に明らかにすることができました。また、その他の建物等についても、確度の高い推定が可能となり、さらに『資財帳』に記載されない施設も発見され、西大寺食堂院の全貌がほぼ明らかになりました。

食堂院は重要な施設ですが、その全貌は多く不明で、今回の成果は古代寺院のあり方に迫るための重要な材料になると考えます。

西大寺は、称徳女帝発願の、平城京最後の寺で、東大寺にならぶ「西大寺」の名を冠しながら、早くに衰退し、その栄華はわずかに『資財帳』に伝えられるだけでした。今回の調査で、その一角を

具体的に明らかにすることができました。

西大寺と同時に造営が進められた尼寺・西隆寺と共通する基礎の工法が確認されました。西大寺造営の際には、東大寺造営に活躍した官人も投入されました。奈良時代を通じての技術蓄積による工法ということができると考えられます。

### 平城京右京の北端域の資料を得た

調査データの少ない平城京右京北端域に関するデータを得ることができました。

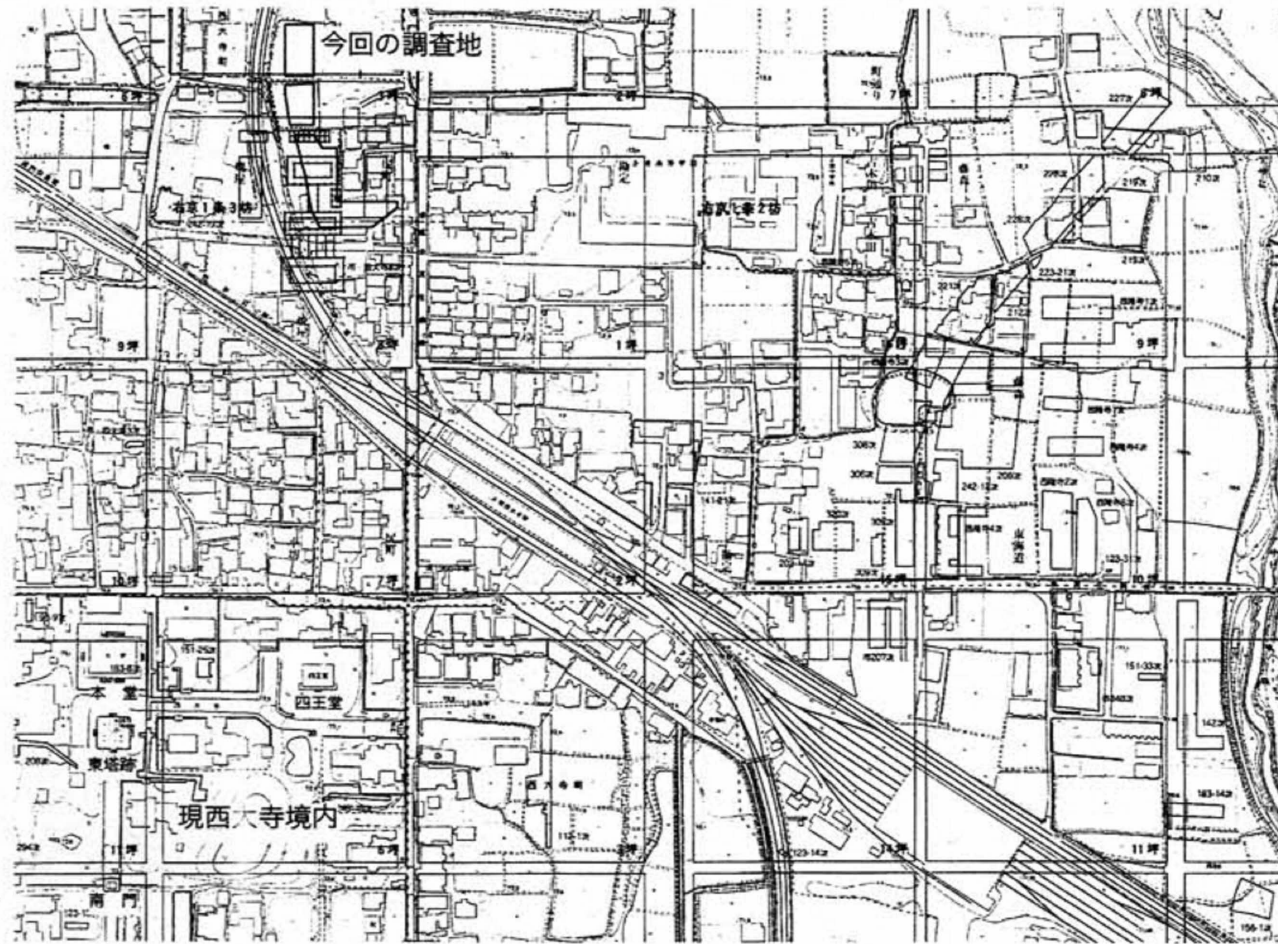
一条北大路について、規模・位置などの情報を得ることができました。今回の調査成果は、遺存地割りから推定されるプランとよく対応しています。こうしたことも含め、右京北端域の条坊制を考える上での重要な資料となります。

北辺坊が、奈良時代前半から活発に利用されていたこと、奈良時代中頃以降に地割りの改変が行われた可能性があることがわかりました。また、南の右京一条三坊八坪との間には、一条北大路およびその側溝が存在し、かつ土地利用の状況も大幅に異なります。一体的に利用されていた痕跡は見いだせませんでした。これらの点は、北辺坊を考える上で重要な知見と言えます。

現地説明会のご案内を電子メールに切り替えております。ご希望の方は、お名前、ご住所、メールアドレスを下記アドレス宛お送りください。  
E-mail アドレス [heijo@nabunken.go.jp](mailto:heijo@nabunken.go.jp)

### 西大寺関係略年表

- 764 (天平宝字8) 孝謙太上天皇、七尺の金銅四天王像の造立を発願(9月)。  
765 (天平神護1) 金銅四天王像の鑄造と、西大寺の造営を開始。  
766 (天平神護2) 称徳天皇、西大寺に行幸(12月)。 ※この頃までに四王院完成か。  
767 (神護景雲1) 佐伯今毛人を造西大寺長官に、大伴伯麻呂を同次官に任ず(2月)。  
769 (神護景雲3) 称徳天皇西大寺に行幸。造営に関わる官人や工人に叙位を行う(4月)。  
※この頃までに薬師金堂完成か。  
弥勒浄土を造る(6月)。  
この年、実忠が東大寺の工人を率いて、西大寺の齋会の幅20基を立てる。  
神護景雲年間 思託、八角塔の様(模型)を造る。  
770 (宝亀1) 東塔の心礎を破却(2月)。 ※この年、塔を八角七重から四角五重に変更か。  
771 (宝亀2) 吳鼓60具を作る(閏3月)。  
兜率天堂(弥勒浄土堂)造営の功績による叙位を行う(10月)。  
772 (宝亀3) 西塔に落雷(4月)。  
栗田公足を造西大寺員外次官に任じる(11月)。  
773 (宝亀4) 津秋主を造西大寺次官に任じる(5月)。  
776 (宝亀7) 西塔に落雷(7月)。  
778 (宝亀9) 文室真老を造西大寺次官に任じる(2月)。  
桑原足床を造西大寺次官に任じる(8月)。  
780 (宝亀11) 西大寺資財流記帳作成(12月)。  
846 (承和13) 火災により講堂(薬師金堂か)とその仏像焼失(12月)。  
927 (延長5) 塔が火災に遭う(10月)。  
928 (延長6) 塔、落雷により焼失(7月)。  
962 (応和2) 大風雨により食堂倒壊(8月)。(東大寺南大門・興福寺講堂なども同時に倒壊)  
11世紀初め この頃、四天王像は露仏で、輔静が四王堂を再建したと伝えられる。  
1011 (寛弘8) 西大寺塔実検文が作られ、この頃まで塔が傷みながらも現存(3月)。  
1048 (永承3) この頃、鐘楼倒壊により、鐘は放置状態。  
1106 (嘉承1) この頃、食堂に弥勒金堂の仏像を安置。食堂が弥勒金堂として機能。  
1138 (保延4) 四王堂(あるいは食堂)に修造の功績により別当済円を権律師に任ず。  
1140 (保延6) この頃、食堂(弥勒金堂として機能)と四王堂と塔1基だけで残り、他は礎石のみ。  
1153 (仁平3) 塔修造の功績により覚珍を権律師に任じる。  
1235 (文暦2) 叡尊が西大寺に入る。以後、1290年(正応3)に没するまで西大寺の復興に努める。  
1307 (徳治2) 弥勒金堂(食堂)が燈爐の火による火災で焼失。



調査地位置図 S=1:4000  
※平城京条坊総合地図を一部改変

奈良時代後期、宝亀十一年(七八〇)に作成された西大寺の財産目録。資財帳は、寺院の敷地・建物・仏像・経典・仏具や所領などを書き上げた文書で、多くは寺院の由緒(縁起)も記され、奈良・平安時代に寺院財産の管理のために作成され、政府に提出された。西大寺資財流記帳はもと四巻十四章からなり、その第一巻の内容(縁起坊地・堂塔房舎・仏菩薩像・経律論疏・官符圖書・楽器衣服の六章)が上下二巻に分けられた形で現存する。筆写の時期は鎌倉時代にさかのぼるか、十三世紀頃から西大寺の周辺寺領の回復がはかれる中で、資財帳は西大寺の主張の論拠として着目された。ここに記載のある金堂院・十一面堂院・西南角院・東南角院・四王院・小塔院・食堂院・馬屋房・政所院・正倉院などからなる伽藍・雑舎や、各堂に安置された仏像・仏画などは、創建当時の西大寺の壮麗な姿をしるし、国内各地の寺領に関する公驗(証拠書類)の記載は、当時の寺院所領の存在形態を知る上で類例のない資料といえる。また法会に用いる伎楽面・衣服・楽器等の記事は音楽・舞楽資料として貴重である。(山口英男)

『西大寺資財流記帳』解説

『西大寺古絵図は語る』

(奈良国立博物館、2002年)より

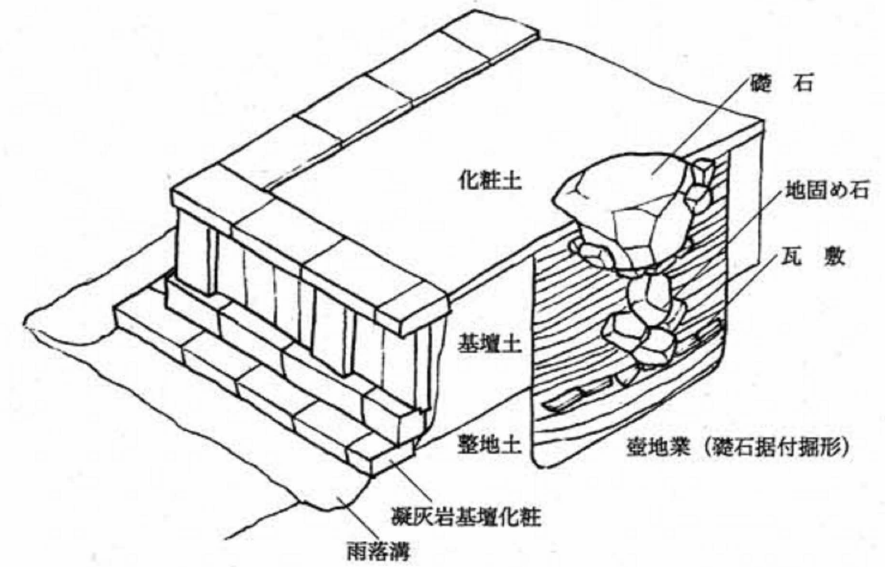
6 西大寺資財流記帳

鎌倉時代 十三〜十四世紀  
西大寺  
紙本墨書

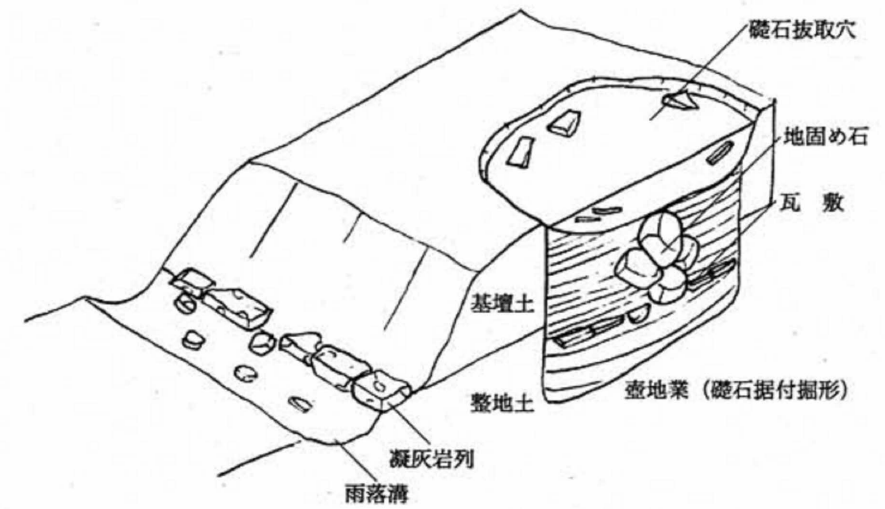
二巻

- 瓦葺食堂一宇 長十一丈、廣六丈。
- 檜皮殿 長十丈、廣四丈。
- 檜皮雙軒廊三宇 各長三丈、中廣一丈六尺、東西二宇、各廣一丈四尺。
- 瓦葺大炊殿 長九丈、廣五丈。
- 東檜皮厨 長十一丈、廣四丈。
- 瓦葺倉代 長五丈、廣二丈。
- 西檜皮厨 長十一丈、廣四丈。
- 瓦葺倉代 長五丈、廣二丈。
- 瓦葺甲雙倉 各長一丈三尺五寸、中間 長一丈二尺八寸、廣一丈八尺四寸。

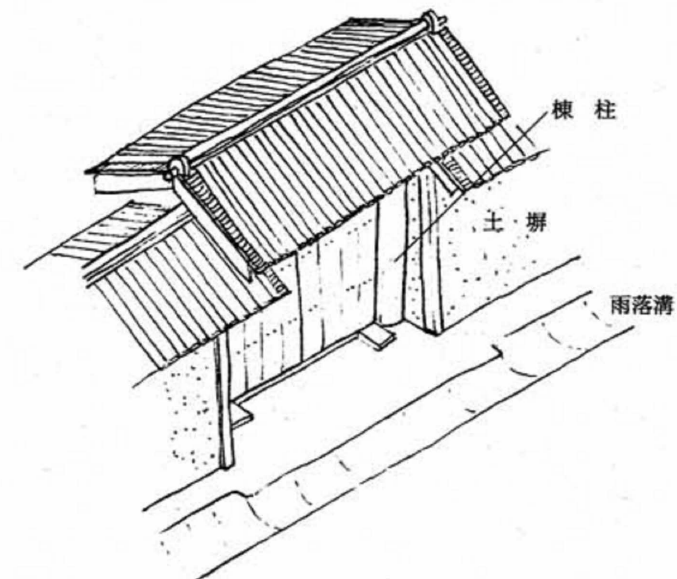
『西大寺資財流記帳』食堂部分



付図1 大炊殿基礎地業 模式図  
『古代の官衙遺跡1 遺構編』(奈良文化財研究所、2003年)を一部改変

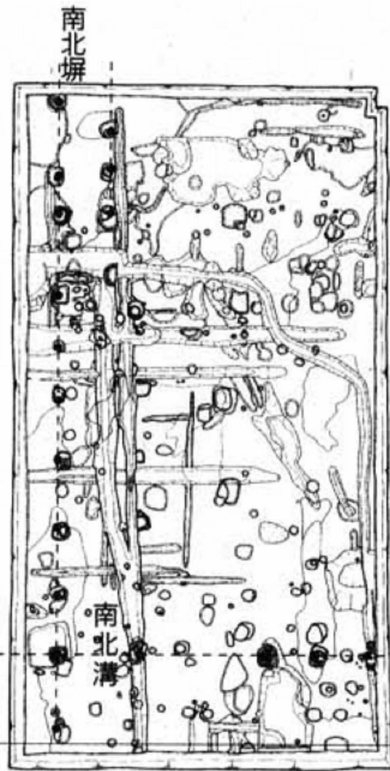


付図2 大炊殿検出遺構 模式図

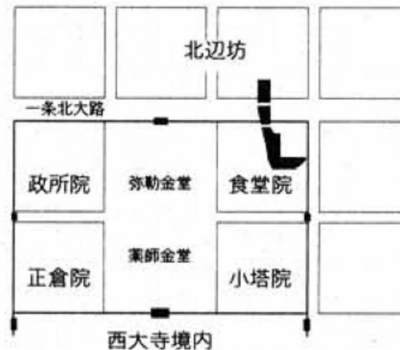


付図3 北門 イメージ図(北東から)

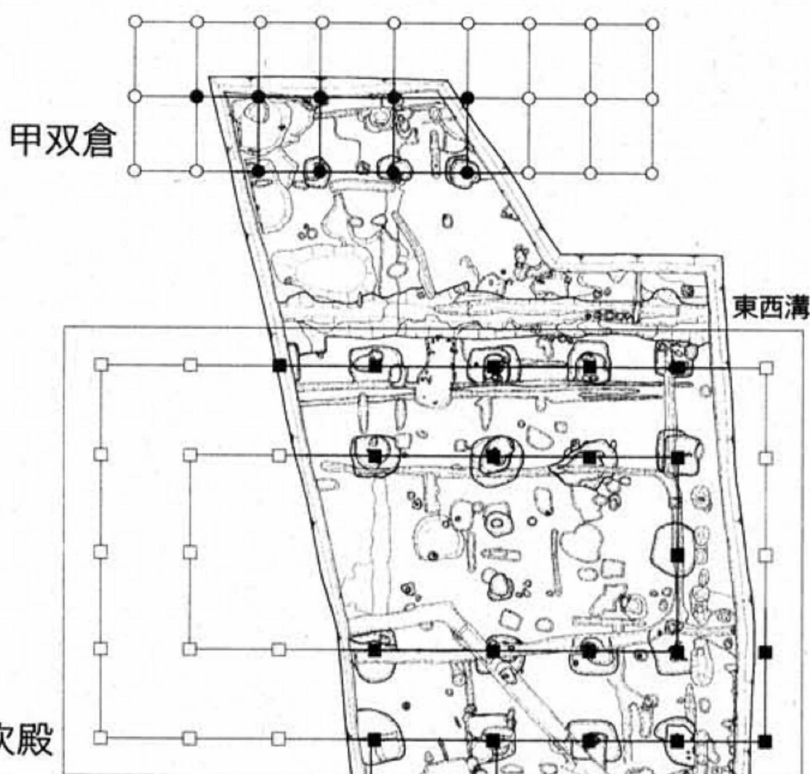
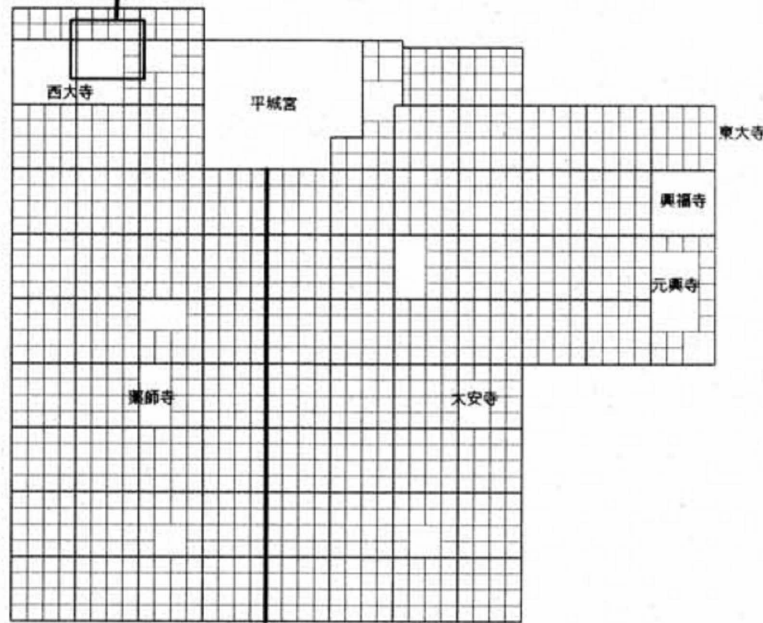
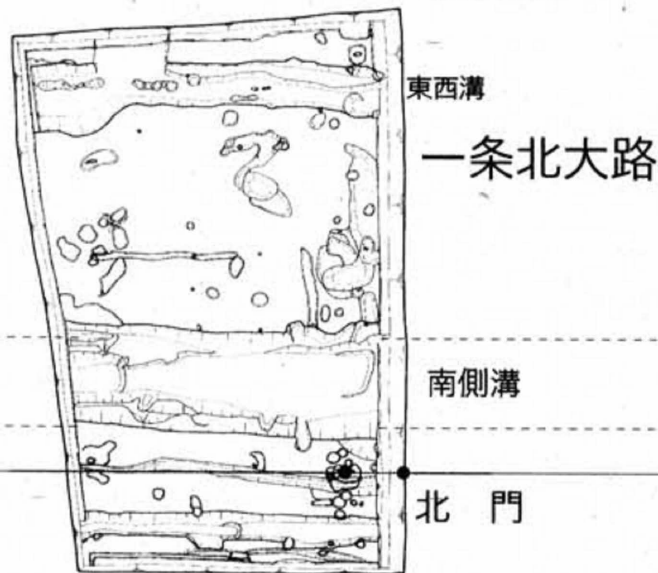
Y-20,100



北辺坊



X-144,600



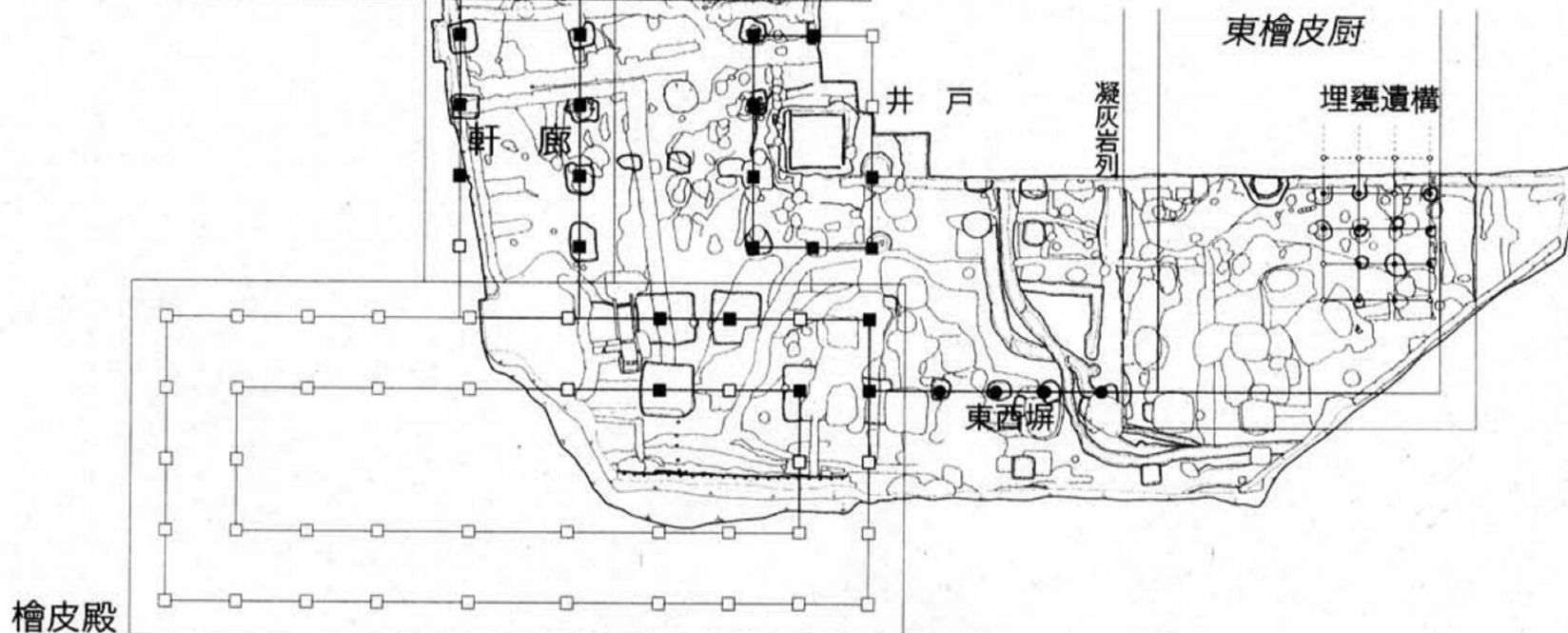
西大寺食堂院・北辺坊の調査  
(平城第404次・410次)

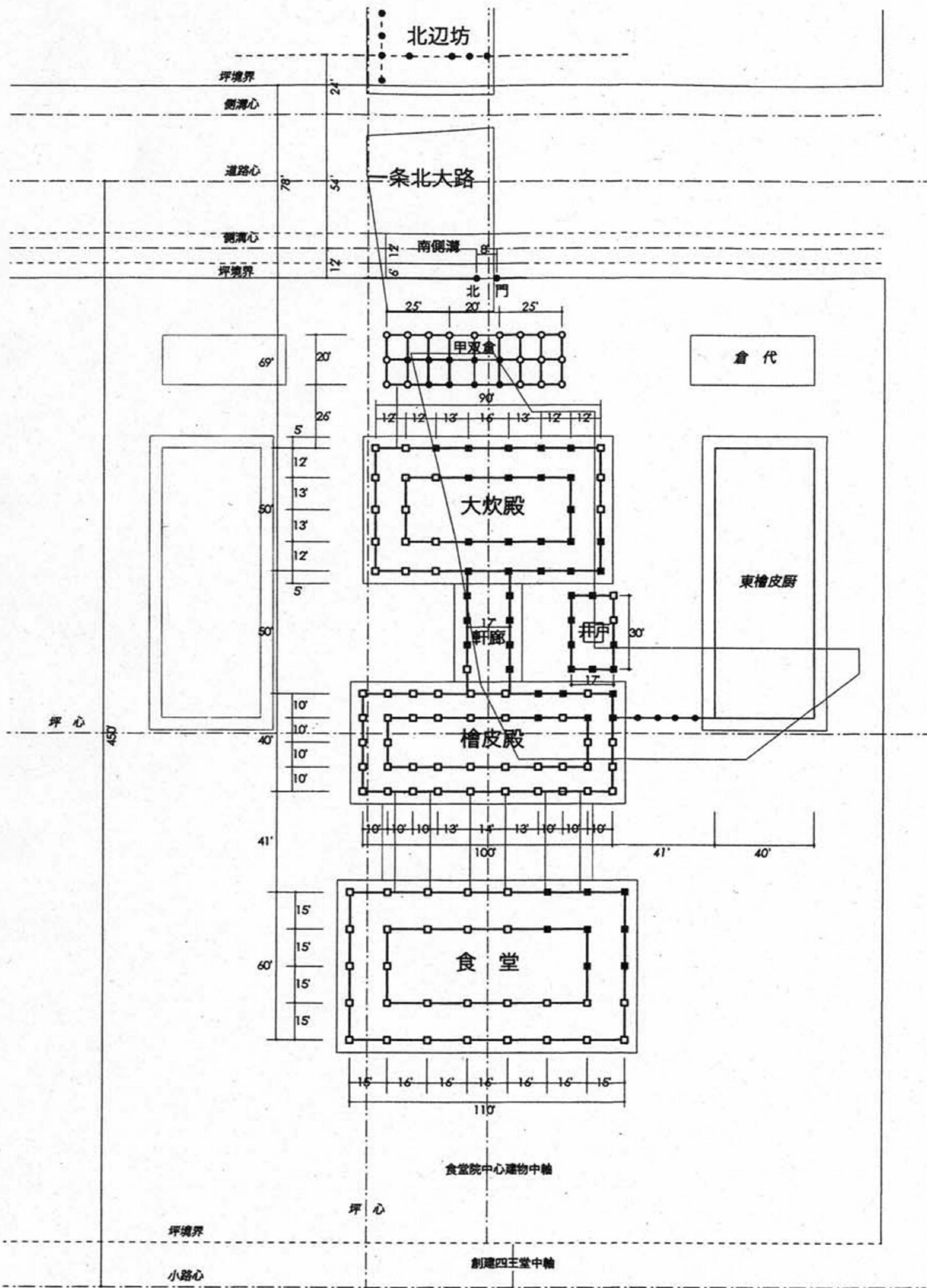


遺構平面図 S = 1:300

□: 礎石 ○: 掘立柱 黒塗は検出済を示す。  
文字の斜体は推定を示す。

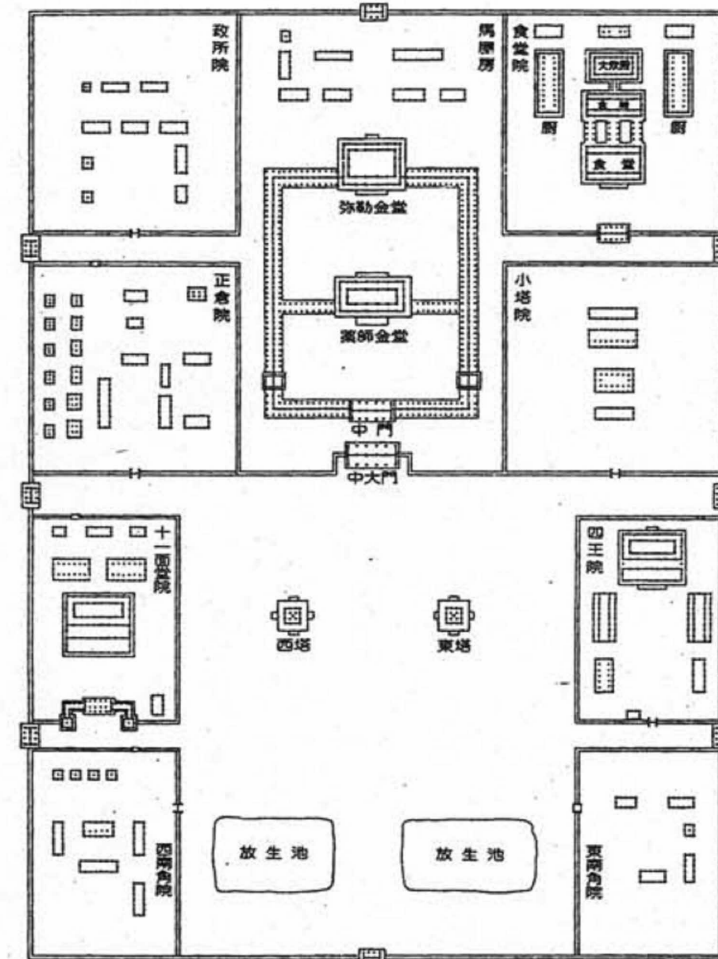
X-144,650





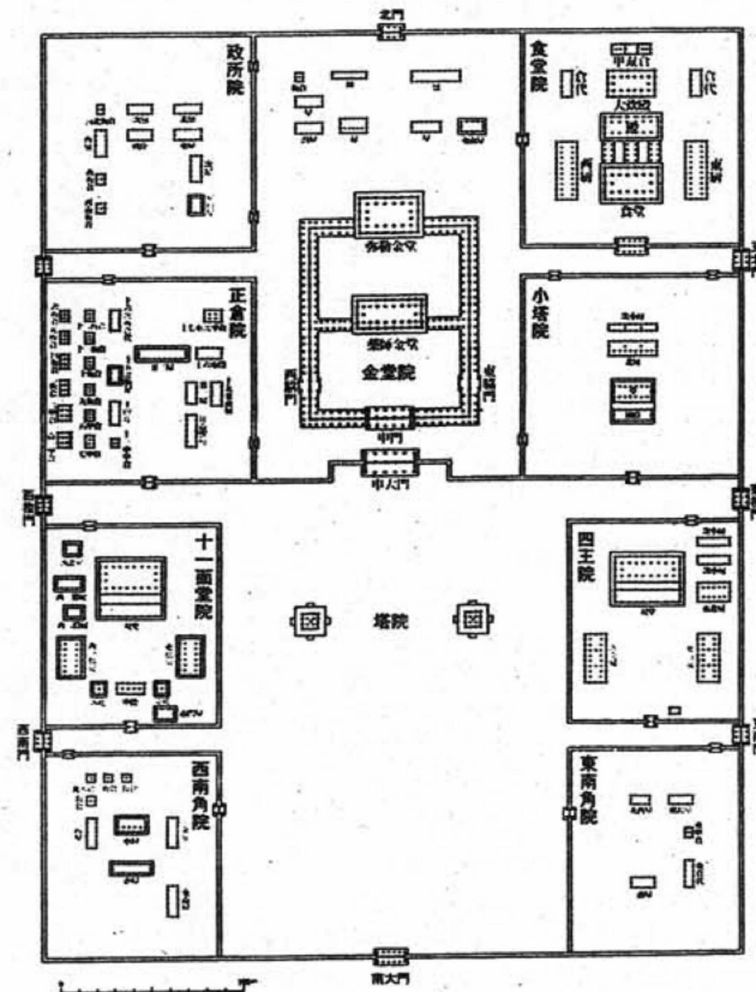
西大寺食堂院 配置図 S=1:600

単位：1'=1尺（約30cm） 文字の斜体は推定を示す。  
 □：礎石 ○：掘立柱 黒塗は検出済を示す。



西大寺伽藍復原図(1)

『平城京復元模型記録』(奈良市、1978年)より



西大寺伽藍復原図(2)

『西陸寺発掘調査報告書』

(奈良国立文化財研究所、1993年)より